

研修会のお知らせ
20ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年5月1日発行

2014.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

5号

第36巻
No.298



カリン *Chaenomeles sinensis* Koehne (バラ科 *Rosaceae*)

生薬 コウヒモッカ（光皮木瓜）10月果実が熟した頃採取し、縦に半分が四つ切りにして、切り口を上にして陽乾燥する。

成分 malic acid,citric acid,saponin,tannin,flavone,caffeine等。

効能 鎮癌、鎮咳、利水、鎮痛、疲労回復作用があり、木瓜湯、導水茯苓湯などの漢方処方に配合される外、鎮咳や疲労回復を目的にカリン酒として飲用される。

生薬 カリン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

○○表紙について○○

生薬名モッカ（木瓜）の原植物が混乱しているようです。日本薬局方外生薬規格（1989）にモッカは「本品はカリンの偽果である」とされていることが原因のようです。もっとも「注」には「本品は木瓜の正品ではないが、代用品とすることができると記されているのですが。最近の日本薬局方外生薬規格（2012）では「本品はカリンの偽果（光皮モッカ）又はボケ（*C. speciosa*）の偽果（皺皮モッカ）である」と改められました。これは現在の中国の市場品がカリンの実を光皮木瓜、ボケの実を皺皮木瓜としていることによると考えられます。しかし、朝鮮、日本ではカリンを「木瓜」と言い、また「和木瓜」とも呼んでいることから誤解が生じているように思います。ややこしいことには「和木瓜」にクサボケ（*C. japonica*）を充てる場合がある事です。確かにクサボケは日本の本州から九州にかけて自生する同属の落葉低木である事から「和木瓜」の名称が合っているように思われます。

これらの疑問を中国の古文獻、日本の古文獻から説明して行きます。中国では『名醫別録』（502-536）に「木瓜は山陰、蘭亭に尤も多く、彼の地ではこれを良果としてある。榲桲といふ大きくして黄なるものがあり、榧子といふ小さくして渋いものがある。」と述べ、ボケ（木瓜）とカリン（榲桲）、クサボケ（榧子）をはっきりと分けています。『本草綱目』（1590）にはそれぞれが別項で掲載され、加えて別属であるが良く似ているマルメロ（*Cydonia oblonga* 榲桲）の項も設けられています。

日本においては中国原産のボケは平安時代に渡来したと思われています。漢字の木瓜は唐音でモックワと発音され、「モケ（毛介）」となり、「ボケ」となったことが『本草和名』（918）に記されています。一方カリンもまた中国を原産にしている落葉高木ですが、日本に何時の頃渡来したかは不明です。一説に弘法大師が唐からの帰朝の際に持ち帰ったものだと伝えられ、現在の香川県指定自然記念物とされている「矢原邸の森」に手植えたものの二代目と伝えられている大きなカリンの木があります。カリンの名はその木目が家具や床柱に使われるフタバガキ科の花欄に似ているところから付けられたといわれています。中国名は榲桲と云い、明らかに木瓜とは区別をつけています。クサボケは前述したように元々国内に自生していたものです。マルメロは中央アジア原産で、寛永11年（1634）に中国から長崎に渡来した記録があります。

『和漢三才図会』（1713）には『本草綱目』と同様にボケ（木瓜）とカリン（榲桲）、クサボケ（榧子）、マルメロ（榲桲）の項も設けられ、「世に木瓜と称する者は本草の註に合わず。すなわち木桃にして木瓜にあらず。……二物は功相近しといえども、よろしく用を弁ずべし」とあり、『本草綱目啓蒙』（1803）でも四種の生薬があげられ「真の木瓜と呼ぶ者は大さ八分許りなるを、厚さ二三分に横に切り乾たる者なり。此はくさぼけの実にして榧子なり、真に非ず。又二寸許の長さなる実を堅く四つに切りて乾たるあり、是榲桲にして亦真に非ず。」とはっきりと分けています。

西洋ではディオスコリデスの薬物誌（1世紀頃）にボケ属に近い仲間としてマルメロが胃に良く、利尿作用があると記され、またヨーロッパ東南部原産のサンザシに似たセイヨウカリン（*Mespilus germanica*）が果物として、また収斂作用を期待して用いることが記されています。（村上守一 記）